

井尻B遺跡 16

—第22次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第923集



遺跡略号 IGB-22

調査番号 0133

2007

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では、こうした文化財の保護と活用に努めているところであります。各種の開発事業によってやむをえず失われる埋蔵文化財については、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、個人専用住宅の建設に先立って行った南区井尻1丁目地内に所在する井尻B遺跡群第22次調査の成果について報告するものです。井尻B遺跡群は近年の調査により、青銅器やガラス製品の生産も行った弥生時代のarkan点集落の一つであることが判明し、また飛鳥時代から奈良時代にかけては寺院址や古代の役所とも考えられる官衙の建物群が発見することが明らかになっています。今回報告する第22次調査では、官衙の建物群と方位を同じくする区画溝が検出されており、井尻B遺跡群における古代の集落景観を復元する上で意義があるものと考えられます。

本書が市民の皆様の文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました建築主の上野浩氏をはじめとする関係各位の方々に対し、厚く感謝の意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成13（2001）年11月6日から平成13（2001）年12月5日まで国庫補助金による発掘調査を実施した、個人専用住宅建設に伴う井尻B遺跡群第22次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をSB、溝状遺構をSD、土坑をSK、柱穴をSP、性格不明遺構をSXとしている。なお報告の遺構番号は、調査時の番号をもとに整理時に一部修正して新たにつけ直したものである。
3. 本書の遺構図に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。ただし、井尻地区に設置されている福岡市教育委員会設置の国土座標測量基準杭より国土座標を移動して調査区の位置を求めている（Fig.2）。なおこの国土座標は日本測地系（第2系）である。またレベルは隣接する市立宮竹小学校に水道局により設置された木準点を利用し、これを移動している。ただし巻末の持録の座標は世界測地系である。
4. 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、上方高弘、坂口剛毅が実測し作成した。遺物の実測は西堂将夫が行った。拓本は成清直子が行った。製図は成清、坂井かおり、平井宏美、宇野美嘉が行った。遺構写真は久住が撮影した。また本書の編集および執筆は久住が行った。
5. 本調査に関わる出土遺物と記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
6. 裏表紙写真は調査区西半（I区）の全景（西から）である。

目 次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
3. 調査地点の位置と歴史的環境.....	1
II. 調査の記録.....	5
1. 調査の経過.....	5
2. 調査の概要.....	7
3. 検出遺構.....	9
1) 溝状遺構.....	9
2) 掘立柱建物.....	12
3) その他の遺構.....	13
4. 出土遺物.....	15
III. 小結.....	16

挿図目次

Fig. 1 調査地点とその周辺	2	Fig. 8 SD004 (SD003上層) 平面図	10
Fig. 2 井戸B22次調査地点敷地図	4	Fig. 9 SB01実測図	11
Fig. 3 井戸B22次調査区平面図	6	Fig.10 SX002上層図	12
Fig. 4 SD001上層図・断面図	7	Fig.11 SX005上層図	13
Fig. 5 SD003上層図 (1)	9	Fig.12 SD003・004出土遺物	14
Fig. 6 SD003上層図 (2)	10	Fig.13 その他の遺構出土遺物 (2)	15
Fig. 7 SD003西側とSD001の関係 平面図	10	Fig.14 井戸B遺跡群北半における 正方位を示す古代の遺構	16

写真目次

Ph. 1 I区表土除去後遺構検出状況 (西から)	3	Ph.10 (I区) SD003完掘状況 (東から)	8
Ph. 2 I区全体写真 (東から)	3	Ph.11 SD003土層③ (西から)	8
Ph. 3 II区全体写真 (西から)	5	Ph.12 SD003土層② (東から)	8
Ph. 4 SD001掘削状況 (南から)	7	Ph.13 SD003土層① (西から)	8
Ph. 5 SD001掘削状況 (北から)	7	Ph.14 (I区) SD004掘削状況 (東から)	11
Ph. 6 SD001上層 (南から)	7	Ph.15 (II区) SD004掘削状況 (西から)	11
Ph. 7 SD001西側拡張区掘削状況	8	Ph.16 SX002 (西側→中央) (南から)	12
Ph. 8 SD001南側下層 (土層⑤) (北から)	8	Ph.17 SX002 (中央→東側) (南から)	12
Ph. 9 SD001南側下層SD003西側連結部 確認状況	8	Ph.18 SX005中央ベルト南北土層 (東から)	13
		Ph.19 SX005掘削状況 (西から)	13

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13（2001）年9月20日、上野 浩氏より、南区井尻1丁目735番5における個人専用住宅の建設に関して、文化財保護法に基づく埋蔵文化財の事前審査申請（工事届出）が提出された（事前審査番号13-2-502）。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻B遺跡群に含まれ、予定される工事は基礎工事も比較的浅い掘削の個人住宅建設であるが、周囲の発掘調査や試掘調査の成果では地表からかなり浅いレベルで遺構が検出されることがあり、工事が埋蔵文化財へ影響する可能性が懸念された。そのため、遺構の有無と検出レベルの確認のため10月11日に試掘調査を行うことになった。試掘調査の結果、周囲の成果からの想定通り、地表下-20cmというきわめて浅いレベルで遺構が検出され、予定される工事が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが確定となった。したがって、工事に先立って発掘調査が必要と判断し、建築主の上野浩氏ら関係者と埋蔵文化財課で協議を行い、その結果、文化財保護法第57条の2（現93条）に基づき、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。平成13年10月19日に上野浩氏より埋蔵文化財課に埋蔵文化財発掘調査願いが提出され、協議の結果、平成13年11月6日より発掘調査（本調査）を行うことになった。なお発掘調査費用については、調査の原因が個人専用住宅建設であることから国庫補助金を適用することになった。

なお本調査は平成13（2001）年12月5日に終了した。また整理作業および報告書作成は、平成18（2006）年度に行なった。

2. 調査の組織

調査委託 上野 浩

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（本調査年度）、埋蔵文化財第1課（整理年度）

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男、調査第1係長 山口謙治（本調査年度）

埋蔵文化財第1課長 山口謙治、調査係長 山崎龍雄（整理年度）

調査庶務 文化財整備課管理係（本調査年度） 宮川英彦

文化財管理課管理係（整理年度） 鈴木由喜

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係 大塚紀宜（本調査年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係（本調査年度）、埋蔵文化財第1課調査係（平成18年度）

久住猛雄

以上のはか、本調査においては発掘作業員の方々のご協力を得た。また整理作業にあたっては、西堂将夫、宇野美嘉、坂井かおり、成清直子、平井宏美の手を煩わせた。また、本調査に至る協議および条件整備などについては、調査委託者の上野浩氏およびその建設請負業者である福岡セキスイハイム株式会社の関係者のご理解とご協力を得た。これら関係者の方々に対し、記して感謝申し上げたい。

3. 調査地点の位置と歴史的環境（Fig.1）

井尻B遺跡群は、那珂川と御笠川水系にある諸岡川に挟まれた段丘上にあり、弥生時代に栄えた「奴国」の二大拠点集落である須玖岡本遺跡群（春日市）と比恵・那珂遺跡群（博多区）を結ぶ線上のほぼ中間に位置する。遺跡には主に弥生時代から古墳時代前期の集落と墓地、古墳時代中期の古墳（井尻B1号墳）、飛鳥時代から平安時代の集落、官衙、寺院址などが展開する。井尻B遺跡群はすでに大正年間に九州帝国大学（当時）の中山平次郎博士が踏査し、考古学界に知られていた。さらに近世の青柳種信による「筑前國續風土記拾遺」にも、那珂郡井尻村の条において、「熊野権現」の「鉢の鎧館」や「大塚」（＝井尻B1号墳）、「古瓦多く出る」「昔大寺など有りし」（＝井尻庵寺）との記述があり、遺跡としての認識がすでにみられる。遺跡群はおよそ南北900m、東西300mの広がりを有し、特に遺

構数のピークである弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構の広がりは25ha前後であり、須玖岡本や比恵、那珂という二大集落を除けば全國的にも大型集落遺跡の一つとしてよい。弥生時代中期初頭から古墳時代前期前半まで継続的な遺構があり、青銅器生産関係遺物が複数地点（伝「熊野櫛現」の後広蔵出土の広形銅矛鋲型、6次出土の小型倣製鏡・銅鑄鉢型、青銅塊、11次の中細形銅矛鋲型、17次B・C区出土の広形銅戈鋲型、埴堀2点、青銅滴付着土器、ガラス勾玉鉢型）で数多く出土しているなど「撲点集落」としての要件も備えている。弥生時代の墳墓遺構も多く検出され、遺跡群北端の16次・17次E区、中央部南側の21次付近（中山平次郎の報告地）の2カ所の覆棺墓群が知られ、主に汲田式から須玖式（中期前半～中頃）である。ただし集落遺構が多くなる弥生時代中期後半以降の墓地は不明確である。遺跡群南部の2次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される土壙墓・石蓋土壙墓群が検出されている。その他、方形周溝墓の可能性のある溝もある（9次）。井戸Bの北北西側に埋没谷を挟んで接する五十川遺跡の南部では、弥生時代終末から古墳時代前期までの箱式石棺墓や方形周溝墓、円墳が検出されており、井戸B北部の同時期の集落に関連する可能性がある。集落遺構は古墳時代前期前半では継続するが、前期後半以降ほとんど見られなくなり、古墳時代中期

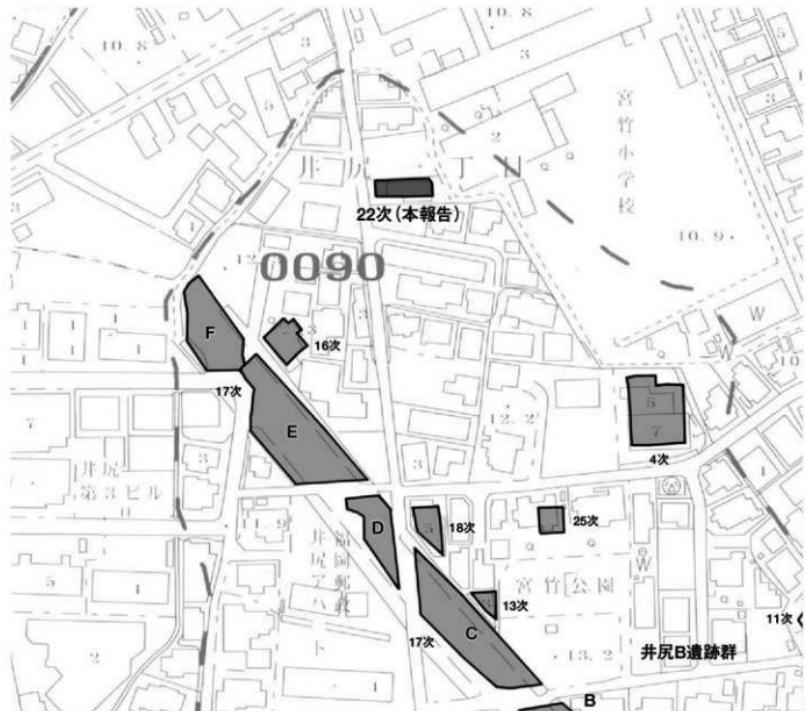


Fig.1 調査地点とその周辺 (S=1/1,500)

に埴輪を有する径25m前後の井戸B 1号墳が遺跡群南部に築かれる他は段丘の利用がなされない状況となる。

その後、6世紀後半に至り段丘の一部で集落が再開する（11次、17次A区）が、遺構・遺物は少ない。次に遺構群が多く展開するのは飛鳥時代末期（7世紀末）から奈良時代である。特に古瓦を多く出土し寺院基壇跡の可能性が高い整地層が検出された3次調査地点や、9次の総柱建物（倉庫か）、17次B・C・D区の古瓦を伴う十字状に交差する正方位の溝（東西溝、南北溝）とこれに沿った方位の掘立柱建物群や、南北方向の道路遺構、22次では東西溝と南北溝がそれぞれ検出されている。これらの遺構群は井戸Bの中央部から北部にかけて正方位に軸をそろえて展開する。3次地点の井戸B廃寺は奈良時代であるが、17次の溝と建物群は7世紀末に通り、古瓦を伴うものの寺院址というよりは官衙の類と推定され、あるいはある時期の那珂郡衙（時期的に「評術」を含むか）の可能性をも含めて今後検討されるべきであろう。また11次では「寺」とヘラ書きされた奈良時代の須恵器皿が出土している。この時期の遺構は遺跡群南部の6次地点でも検出され、南北700m、東西250mの広がりを示す。官衙十寺院十集落の複合遺跡が展開していたようである。また、井戸B遺跡群は古代官道の水城西門ルート推定線に近い場所に含まれ



Ph.1 I区表土除去後遺構検出状況（西から）



Ph.2 I区全体写真（東から）

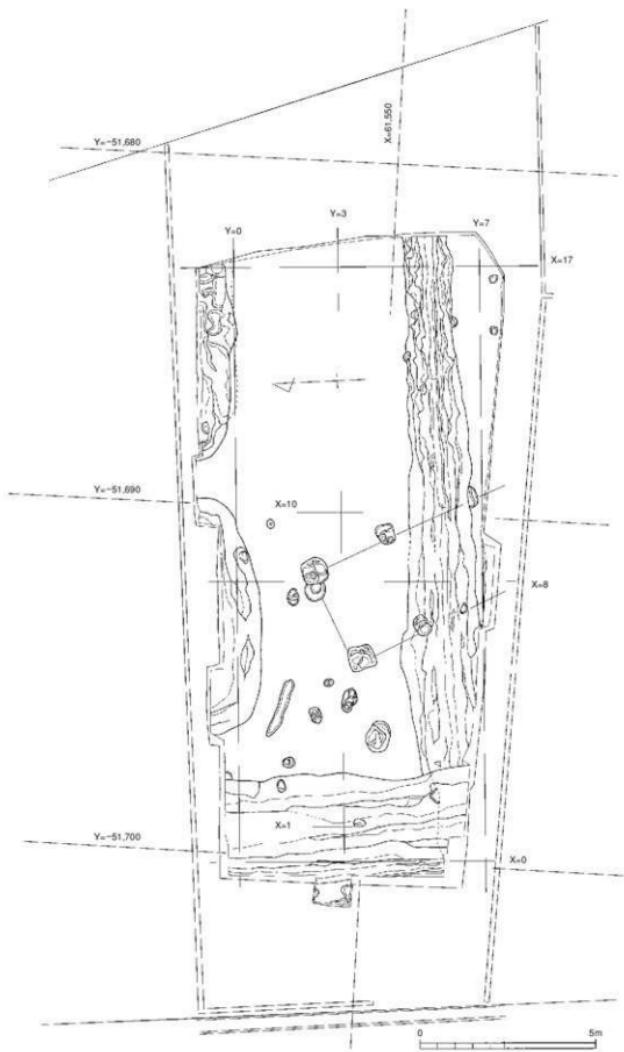
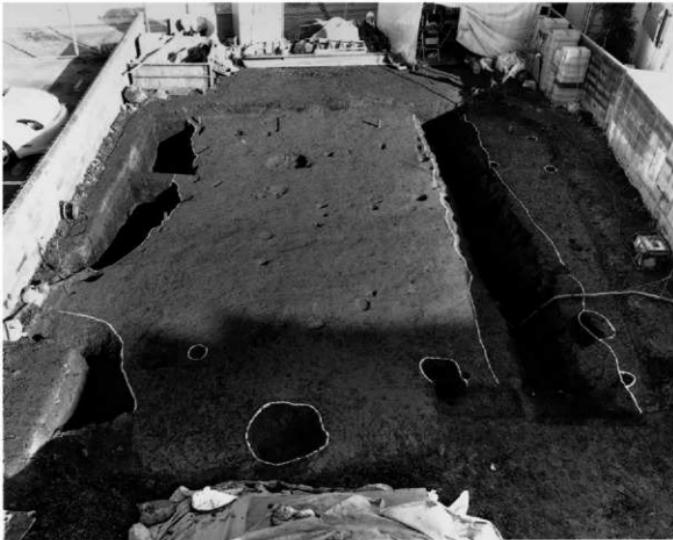


Fig.2 井房B22次調査地点敷地図 (S=1/125)



Ph.3 Ⅱ区全体写真（西から）

ていることも注意される。なお奈良時代以後は遺構が比較的少くなり、奈良時代の状況は特殊な施設が所在したことによる一時的な状況であったようであり、その後は小規模な村落が断続的に営まれる景観であったと考えられる。

第22次調査地点は井尻B遺跡群の北端付近に位置し、「井尻庵寺」推定地から北に400mの地点にある。付近では、17次B・C・Dの正方位を示す飛鳥時代末から奈良時代初頭の官衙状遺構群があるが、22次地点はこれに近接し、すでに触れたように、これらに関連する可能性のある正方位の溝状遺構が検出されている。また22次地点付近の周囲の標高は11.3～11.5mを測る。

II. 調査の記録

1. 調査の経過

発掘調査（本調査）は2001年11月6日に重機による表土除去から開始した。調査範囲は敷地の7割を占めることになり（Fig.2）、廃土置場の都合上、調査区を分割して調査することにしたが、まず西側半分（I区）の表土除去を行った。6日から7日にかけて発掘機材の搬入と現場設営を行った。11月7日より遺構検出を開始し、8日には調査区内の基準杭設定（杭打ち）と、近隣の水準点からレベルを移動した。11月12日までに遺構の大部分の掘削を終了し、13日にI区の全体写真を撮影した。11月19日までにI区の図面作成などの作業を終了した。11月20日に重機による反転作業を行い、同日に東側半分（II区）の遺構検出や杭打ちなどの作業を開始した。11月29日までに遺構の大部分の掘削を終了し、30日にII区の全体写真を撮影した。12月4日までに図面作成などの残りの現場作業を終了し、12月5日には発掘機材を撤収し、重機により廃土を埋め戻して本調査を終了した。

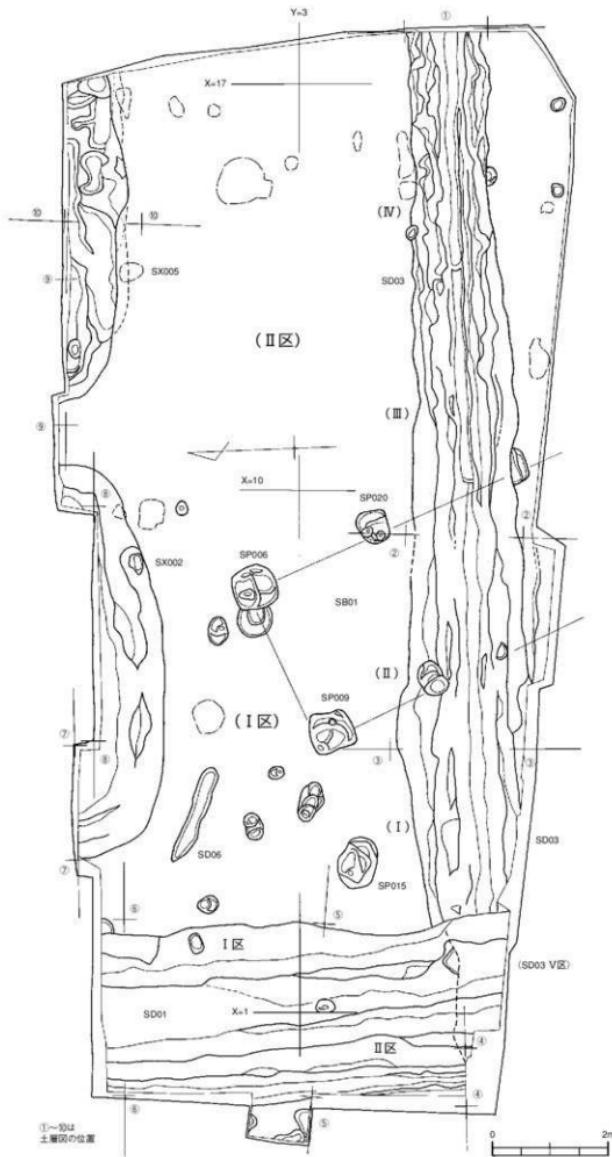


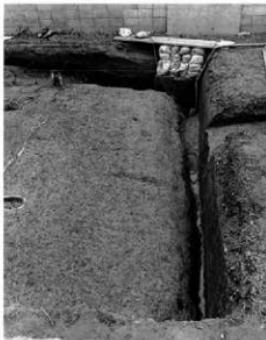
Fig.3 井戸B22次調査区平面図 (S=1/75)

2. 調査の概要

重機により地表下10~30cmまでのわきめで浅い表土を除去すると、橙褐色の鳥栖ローム地山が現れ、これを掘り込む暗褐色から黒褐色の覆土の遺構が検出される（Ph.1）。調査面積は141.33m²である。検出した遺構は、溝状遺構4、掘立柱建物1、性格不明大型土坑2、柱穴若干である（Fig.3）。I区（Ph.2、裏表紙写真）の西側では溝SD001を検出した。幅3.5m以上で対岸が未検出である。調査区敷地西側の南北道に平行する。中世後期以降だが、中央最下層には古い細い溝があった痕跡があり、次のSD003と連結する可能性が認められた。溝SD003は幅2m以内の溝で、断面Y字形状である。調査区の南辺をI区からII区まで直線的に東西に走行する。中層以下において、7世紀後半から8世紀前半の土器や瓦が出土した。I区南東には、1×2間の掘立柱建物であるSB001が認められた。覆土や柱穴の遺物から弥生時代中期以降、おそらく弥生後期である。



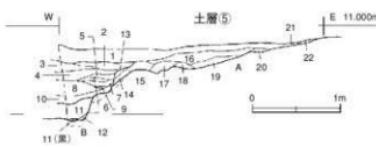
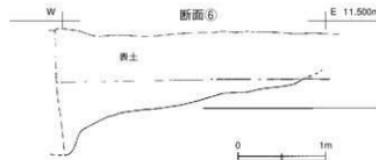
Ph.4 SD001掘削状況(南から)



Ph.5 SD001掘削状況(北から)



Ph.6 SD001土層(南から)



SX003 主成分	性状	参考文献
アルカリワーム 無機物質	無機物質と同様に、主にカリウムを含む。	9. 明るい(暗) 関色シートカラーモード多量 10. 暗い(明) 関色シートカラーモード少量
アルカリワーム 有機物質	(内因) 有機物質多く含む。 例: 腐葉土、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 有機物質多く含む。例: 落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 例: 土壌、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明)	11. 黒褐色シートカラーモード(関色+ナチュラル)、黒褐色を含む場合 有機物質多く含む。例: 落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 例: 土壌、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明)
アルカリワーム 無機物質	(内因) 有機物質多く含む。 例: 腐葉土、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 有機物質多く含む。例: 落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 例: 土壌、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明)	12. ロームシートカラーモード(関色+ナチュラル)、黒褐色を含む場合 有機物質多く含む。例: 落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 例: 土壌、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明)
アルカリワーム 無機物質	(内因) 有機物質多く含む。 例: 腐葉土、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 有機物質多く含む。例: 落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明) 例: 土壌、木立下草、落葉、苔類(藻類) 黒褐色、黒褐色(暗) → 黄褐色、黄褐色(明)	13. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 (ロームシートカラーモードは関色+ナチュラルと同様) 14. 暗い(明) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 15. 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 16. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 17. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 18. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 19. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 20. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量 21. 明るい(暗) 関色シートカラーモード微量 例: 黒褐色シートカラーモードの関色に微量

Fig.4 SD001 土層図・断面図 (S=1/50)



Ph.7 SD001西側拡張区掘削状況（北から）



Ph.8 SD001南側下層（土層⑤）（北から）



Ph.10 (I区) SD003完掘状況（東から）



Ph.9 SD001南側下層SD003西側連結部確認状況



Ph.12 SD003土層②（東から）



Ph.11 SD003土層③（西から）



Ph.13 SD003土層①（西から）

調査区の北辺には、西側（Ⅰ区）にSX002、東側（Ⅱ区）にSX005という性格不明の大型土坑が検出された。遺跡群でもより縁辺となるⅡ区（Ph.3）では遺構がより少なくなる。

3. 検出遺構

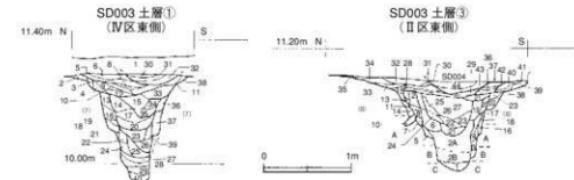
1) 溝状遺構（SD）

SD001 (SX001) (Fig.3, 4, Ph.2, 4~6)

Ⅰ区西側で検出した落ち込み遺構であるが、調査の結果、溝状遺構と認識した。東側の上端からは緩やかに西側へ落ち込むが、調査区西縁付近で急に落ち込む。調査区の一部を拡張して溝の最深部と思われる部分を確認した（Ph.7）。確認できた溝の幅は最大3.5mであるが、この拡張部の最深部を溝の中央とすれば折り返した溝幅は6~7mになるものと推定される。拡張部の最深部は遺構検出面から80cm前後である。上層から中層は褐色~暗褐色土であるが、下層はやや黒い暗褐色、最深部は黒褐色土となる（Fig.4）。11層（Fig.4 F）以下に相当する溝中央と推定される深くなる部分は、本来より細い幅の古い溝の残存で、これが埋没する過程でその溝の方向に沿ってより幅広い新しい溝が掘削されたと考えられる。新しい溝は、出土した中世の土器や陶器（染付、青磁）の細片から中世後期以降の掘削で、近世に埋没（肥前陶磁小片あり）しているものと考えられる。溝下層は、南側でS D 0 0 3 を切るものの（Fig.6右、Ph.8）、その最下層は S D 0 0 3 と一体であった可能性が高い（Ph.9）。

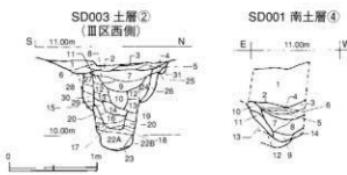
SD003 (Fig.3, 5, 6, Ph.3, 10~13)

調査区の南側縁辺部に沿うように検出したほぼ正東西方位を走行する溝状遺構。延長18mを検出。西側は S D 0 0 1 に切られるが、 S D 0 0 3 の下部に直交して続く。幅1.5~2.2m前後で、検出面からの深さは1.0~1.2m前後を測り、断面形はY字状である。溝の底面は20~30cm幅となる。土層を観



- | | | |
|-------------------|----------------------|----------------------|
| SD001 [Ⅰ区] | SD003 土層①
[IV区東側] | SD003 土層③
[II区東側] |
| 1. 破壊面 | 21. 横型内輪シルバーホーム土質 | 11. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 2. 破壊面 | 22. 横型内輪シルバーホーム土質 | 12. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 3. 横型内輪シルバーホーム土質 | 23. 横型内輪シルバーホーム土質 | 13. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 4. 横型内輪シルバーホーム土質 | 24. 横型内輪シルバーホーム土質 | 14. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 5. 横型内輪シルバーホーム土質 | 25. 横型内輪シルバーホーム土質 | 15. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 6. 横型内輪シルバーホーム土質 | 26. 横型内輪シルバーホーム土質 | 16. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 7. 横型内輪シルバーホーム土質 | 27. 横型内輪シルバーホーム土質 | 17. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 8. 横型内輪シルバーホーム土質 | 28. 横型内輪シルバーホーム土質 | 18. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 9. 横型内輪シルバーホーム土質 | 29. 横型内輪シルバーホーム土質 | 19. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 10. 横型内輪シルバーホーム土質 | 30. 横型内輪シルバーホーム土質 | 20. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 11. 横型内輪シルバーホーム土質 | 31. 横型内輪シルバーホーム土質 | 21. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 12. 横型内輪シルバーホーム土質 | 32. 横型内輪シルバーホーム土質 | 22. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 13. 横型内輪シルバーホーム土質 | 33. 横型内輪シルバーホーム土質 | 23. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 14. 横型内輪シルバーホーム土質 | 34. 横型内輪シルバーホーム土質 | 24. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 15. 横型内輪シルバーホーム土質 | 35. 横型内輪シルバーホーム土質 | 25. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 16. 横型内輪シルバーホーム土質 | 36. 横型内輪シルバーホーム土質 | 26. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 17. 横型内輪シルバーホーム土質 | 37. 横型内輪シルバーホーム土質 | 27. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 18. 横型内輪シルバーホーム土質 | 38. 横型内輪シルバーホーム土質 | 28. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 19. 横型内輪シルバーホーム土質 | 39. 横型内輪シルバーホーム土質 | 29. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 20. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 30. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 21. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 31. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 22. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 32. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 23. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 33. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 24. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 34. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 25. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 35. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 26. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 36. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 27. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 37. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 28. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 38. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 29. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 39. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 30. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 40. 横型内輪シルバーホーム土質 |
| 31. 横型内輪シルバーホーム土質 | | 41. 横型内輪シルバーホーム土質 |

Fig.5 SD003土層図(1) (S=1/50)



察すると、通有のレンズ状堆積はなさず、明らかに堆積土層の不整合がいくつも認められる(Fig. 5, 6左)。何度も掘り直しされた可能性が高い。このことと関係があるか不明であるが、溝の壁面は木根痕で激しい凹凸が認められる部分が多くかった。最下層は八女粘土層ま

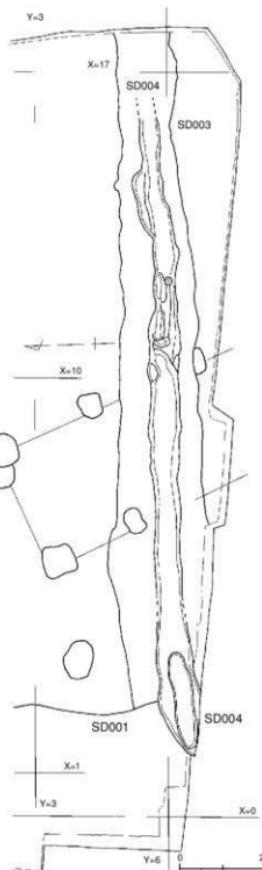


Fig.7 SD003西側とSD001の関係平面図 (S=1/50)

で掘り込まれており、湧水が認められた。調査区端という制約があり十分な確認ができなかつたが、すでに述べたように、SD001の最下層とは本来連結していた可能性が高い(Fig.6右、Ph.8, 9)。本調査の出土遺物の大半がこの溝からの出土であり、主に7世紀末から8世紀の須恵器、土師器、古瓦があり、弥生土器片も出土する。

SD004 (Fig.8, Ph.14, 15)

SD003の上面で、その上層に検出された浅い溝状構造。一部不明確な部分もあったが、ある程度平面的に追うことが出来たので、SD003の埋没後に掘削された別の溝とした。SD003が暗褐色～黒褐色土であるのに対し、SD004は褐色土の覆土である。土層ではやや不明確な(平面と辻接の合わない)部分もあるが(Fig.5, 6左)、SD003上面のほぼ中央を走行し、深さは20cm前後と浅い。SD003の方向とほぼ重なるが、調査区西側で南西側に屈曲するように見える。出土遺物



Ph.14 (I区) SD004掘削状況(東から)



Ph.15 (II区) SD004掘削状況(西から)

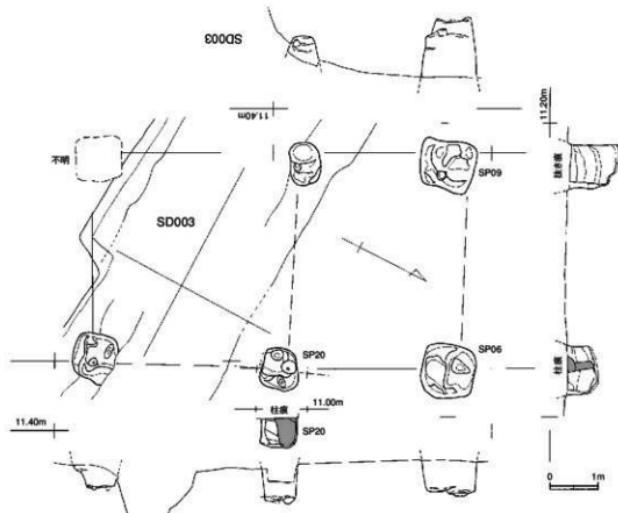
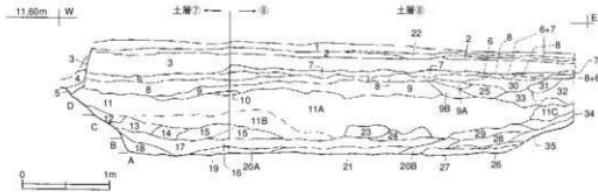


Fig.9 SBO1実測図 (S=1/60)



地質図 記号一覧
 A～D：柱状建物
 E：柱状建物（柱状建物を複数）
 A～E：柱状建物
 C：柱状建物の柱穴（柱孔）
 D：柱状建物の柱穴（柱孔）
 E：柱状建物の柱穴（柱孔）
 F：柱状建物の柱穴（柱孔）
 G：柱状建物の柱穴（柱孔）
 H：柱状建物の柱穴（柱孔）
 I：柱状建物の柱穴（柱孔）
 J：柱状建物の柱穴（柱孔）
 K：柱状建物の柱穴（柱孔）
 L：柱状建物の柱穴（柱孔）
 M：柱状建物の柱穴（柱孔）
 N：柱状建物の柱穴（柱孔）
 O：柱状建物の柱穴（柱孔）
 P：柱状建物の柱穴（柱孔）
 Q：柱状建物の柱穴（柱孔）
 R：柱状建物の柱穴（柱孔）
 S：柱状建物の柱穴（柱孔）
 T：柱状建物の柱穴（柱孔）
 U：柱状建物の柱穴（柱孔）
 V：柱状建物の柱穴（柱孔）
 W：柱状建物の柱穴（柱孔）
 X：柱状建物の柱穴（柱孔）
 Y：柱状建物の柱穴（柱孔）
 Z：柱状建物の柱穴（柱孔）
 1：柱状建物の柱穴（柱孔）
 2：柱状建物の柱穴（柱孔）
 3：柱状建物の柱穴（柱孔）
 4：柱状建物の柱穴（柱孔）
 5：柱状建物の柱穴（柱孔）
 6：柱状建物の柱穴（柱孔）
 7：柱状建物の柱穴（柱孔）
 8：柱状建物の柱穴（柱孔）
 9：柱状建物の柱穴（柱孔）
 10：柱状建物の柱穴（柱孔）
 11：柱状建物の柱穴（柱孔）
 12：柱状建物の柱穴（柱孔）
 13：柱状建物の柱穴（柱孔）
 14：柱状建物の柱穴（柱孔）
 15：柱状建物の柱穴（柱孔）
 16：柱状建物の柱穴（柱孔）
 17：柱状建物の柱穴（柱孔）
 18：柱状建物の柱穴（柱孔）
 19：柱状建物の柱穴（柱孔）
 20A：柱状建物の柱穴（柱孔）
 21：柱状建物の柱穴（柱孔）
 22：柱状建物の柱穴（柱孔）
 23：柱状建物の柱穴（柱孔）
 24：柱状建物の柱穴（柱孔）
 25：柱状建物の柱穴（柱孔）
 26：柱状建物の柱穴（柱孔）
 27：柱状建物の柱穴（柱孔）
 28：柱状建物の柱穴（柱孔）
 29：柱状建物の柱穴（柱孔）
 30：柱状建物の柱穴（柱孔）
 31：柱状建物の柱穴（柱孔）
 32：柱状建物の柱穴（柱孔）
 33：柱状建物の柱穴（柱孔）
 34：柱状建物の柱穴（柱孔）
 35：柱状建物の柱穴（柱孔）
 11A：柱状建物の柱穴（柱孔）
 98：柱状建物の柱穴（柱孔）
 99A：柱状建物の柱穴（柱孔）
 11C：柱状建物の柱穴（柱孔）

Fig.10 SX002土層図 (S=1/50)



Ph.16 SX002 (西側～中央) (南から)



Ph.17 SX002 (中央～東側) (南から)

に中世後期の瓦質土器片などがあり、S D 0 0 1と同時期に存在した可能性がある。

その他、I区検出のS D 0 6はきわめて浅く細い溝であるが(Fig.3)、黒褐色覆土であり、弥生時代の竪穴住居の下部構造の可能性がある。

2) 摂立柱建物 (S B)

S B 0 1 (Fig.9)

調査区中央で検出した1×2間の摂立柱建物。N-27° -W (方位は磁北から)、2.0×5.2mの規模。柱穴は残りのよいSP09、SP06は80cm近い略方形の掘り方である。柱穴のうち二つはS D 0 0 3に切れその壁面で検出し、また南隅にあるべき柱穴は調査区外と思われる。土層観察できた柱穴のうち、SP09は柱を抜いた土層、SP06とSP20は柱痕が観察できた。柱痕の中央を裁ち割った土層であろうSP20から、径20~25cmの柱の太さが考えられる。柱穴の覆土は黒色～黒褐色土主体で、弥生土器の小片が出土し、弥生時代後期を中心とする時期が考えられる。

3) その他の構造

S X 0 0 2 (Fig.3,10, Ph.16,17)

I区北辺と一部II区にかけて検出した、東西13.5m以上×南北3.5m以上の大型土坑。遺構の大半が調査区外にあると推定される。検出面(Fig.10の6,7層上面)からの深さは1.0m前後である。性格不明の土坑だが、底面はほぼ平坦で多く湧水する。土層を観察すると、下層は水成の自然堆積と考えられるが、12~15層、23、24層から上人は為的堆積と思われ、特に11層は一気に埋戻した感がある。遺物はきわめて少なく、弥生土器小片などを含むが、上層覆土の土色などの特徴からは中世以降と思われ、埋め戻されたのはおそらく近世頃ではないかと考えられる。湧水層まで掘り込まれ、灌漑用の溜井(池)か。

S X 0 0 5 (Fig.3,11, Ph.18,19)

Ⅱ区北辺で検出した、東西11.5m以上×南北2.5m以上の大型土坑。遺構の大半が調査区外になる。検出面からの深さは



Ph.18 SX005中央ベルト南北土層（東から）



Ph.19 SX005掘削状況（西から）

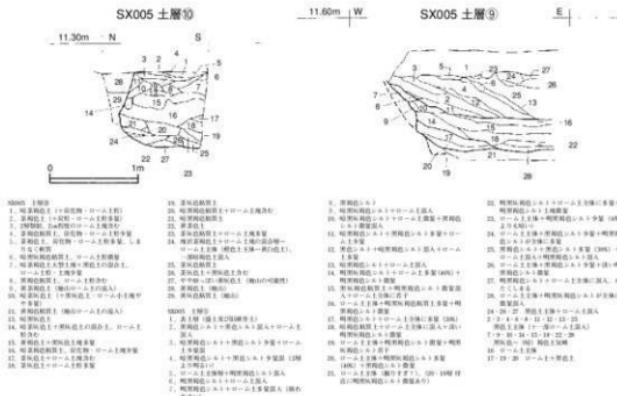


Fig.11 SX005土壤圖 (S=1/50)

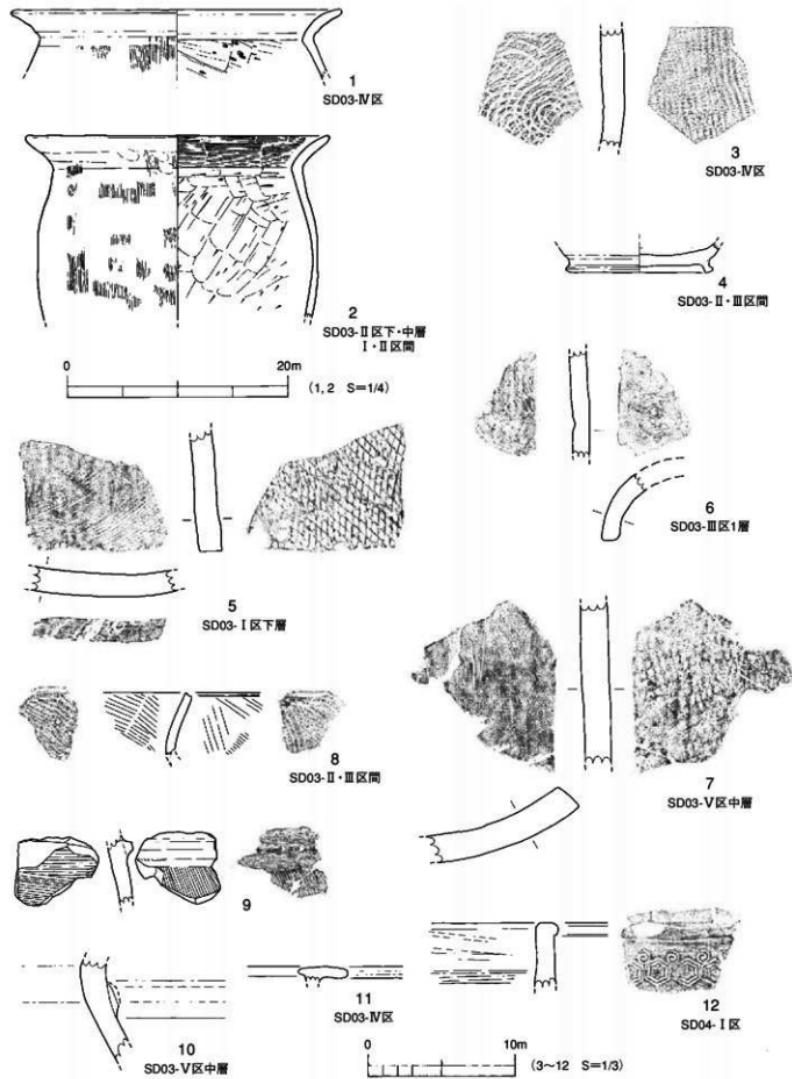


Fig.12 SD003・004出土遺物 (S=1/3, 1/4)

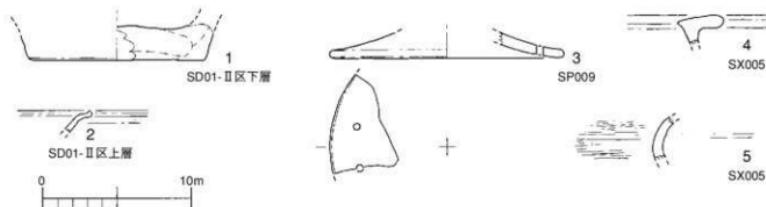


Fig.13 その他の遺構出土遺物 (2) (S=1/3)

80~90cmで、底面はほぼ平坦で、S X 0 0 2と同様に湧水する。東西方向の壁は通常の法面傾斜だが、南北方向の壁は中位がオーバーハングしている。土層を観察すると、最下層のみ水成堆積とおもわれるが、他は下層から人為的に埋め戻したような土層である。東西方向の土層では、中層で一度レベルをならした部分がある（土層⑨の16層上面）。遺物はきわめて少なく、弥生土器小片なども含むが、おそらく中世以降であろう。土坑の性格は不明だが、S X 0 0 2と同様に溜井であろうか。

4. 出土遺物 (Fig.12, 13)

本調査における出土遺物は比較的少なく、総量でパンケース2箱程度であり、遺構の遺存状況から削平が考えられることもあるが、遺跡群の縁辺であることも遺物が少ない理由となろう。多くが小破片であるが、弥生土器、7~8世紀の土師器・須恵器・古瓦、中世後期の土器・陶磁器、近世陶磁器が出土している。以下、図示できるものについて記す。

Fig.12-1~11はSD 0 0 3出土である。**1, 2**は土師器の甕。いずれも形態的に7世紀末~8世紀前半頃の型式か。**1**は、口縁部はヨコナデ、胴部の外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。砂礫を多く含む胎土。橙色~浅黄橙色。中層出土。**2**は、口縁部の外面はヨコナデ、内面はヨコハケ、胴部外面はタテハケ、内面はヘラケズリだが**1**とは方向が異なりやや粗い調整。胴部に粘土帶の凹凸が残る。砂礫を多く含む胎土。プロボーションから7世紀末には上がるか。**3**は須恵器の甕の胴部片。外面は擬格子タタキ後カキメ、灰オリーブ色。内面は同心円文當具痕、暗灰色。**4**は須恵器の高台付の坏身である。内面は回転ナデ後に底面をナデ仕上げ。灰色~褐灰色。高台位置からは8世紀中頃以降か。上層出土。**5~7**は瓦である。**5**は平瓦。外面は斜格子タタキ、内面は粗いハケメ状調整後に一部ナデ。端面は切り落とし平坦にする。灰色の瓦質焼成で胎土には砂礫を多く含む。下層出土。**6**は丸瓦。外面は摩滅もあるがタタキをナデ消しているか。内面は模骨痕と指圧痕があるが、摩滅により布目压痕は不明。桶巻作りであろう。にぶい黄褐色の瓦質焼成で、砂礫は少ない。上層出土。**7**は平瓦。外面は摩滅気味だが粗い斜格子タタキが残り、内面は布目压痕と模骨痕がある。分割面があり桶巻作りであろう。内外表面にはにぶい黄褐色だが断面（芯）は褐灰色で瓦質というよりやや軟質の焼成。砂礫を多く含む。中層出土。**8~11**は弥生土器。溝の時期に伴わないが、付近に弥生時代の集落遺構が広がっていたことを示す。**8**は弥生時代後期半~終末の甕の口縁部片。内外ハケメ。口縁部端面に凹みがある。橙色、石英・長石粒を多く含む。**9**は弥生時代後期半~終末のやや大型の甕の頭部片。もう少し上が内側に傾く可能性がある。頭部に台形状突起。内外にハケメ。胎土・色調は**7**に似る。**10**は弥生時代終末~古墳時代初頭の在地系大甕の頭部片。突起は摩滅するが扁平化した低台形であろう。内外とも摩滅し調整不明。橙色、砂礫は少ない。**11**は須恵器I~II式の甕の口縁部小片。Fig.12-12はSD 0 4出土で、中世後期の瓦質土器火鉢の口縁部。外面はヨコナデ後に刻印文様。内面は板状工具ヨコナデとハケメ。外面は黒褐色、内面にはにぶい黄褐色。

Fig.13-1, 2はSD01出土。1は弥生土器の壺の底部で、形態と厚みから須玖I式か。内外ともに摩滅し調整不明。にぶい橙色、石英・長石を多く含む胎土。2は肥前陶磁（唐津焼）の溝縁皿の口縁部片。全面施釉される。灰オリーブ（灰緑）色。大橋康二氏の編年の肥前陶磁II期。上層出土で、SD01の時期幅を示す。3はSP009出土。丹塗り痕跡があり、弥生時代中期後半から後期初頭の蓋の破片。穿孔が2カ所ある。調整は摩滅のため不明。胎土の地色は橙色、砂礫は少ない。SB01の上限を示す遺物。4はSX005-II区出土の弥生土器の壺口縁部小片。須玖I式。にぶい橙色～褐色、砂礫はやや多い。5もSX005-II区出土。弥生時代終末前後の在地系甕の頸部小片。橙色、砂礫は少ないが雲母粒子がやや多い。4,5は造構の時期を示さず、混入品である。

III. 小結

22次調査における南北のSD001は後世に拡張される以前は、本来は検出した溝幅よりも狭く、東西のSD003とはL字または十字状に連絡していたものと考えられ、実際にSD001最下層はSD003と繋がっていたと観察された。井戸B遺跡群では、「井戸庵寺」をはじめ、ほぼ正方位に走る溝状造構や道路状造構が多く分布している（Fig.14）。22次SD001の線上を南に下ろすと、17次D区東縁の溝状落込

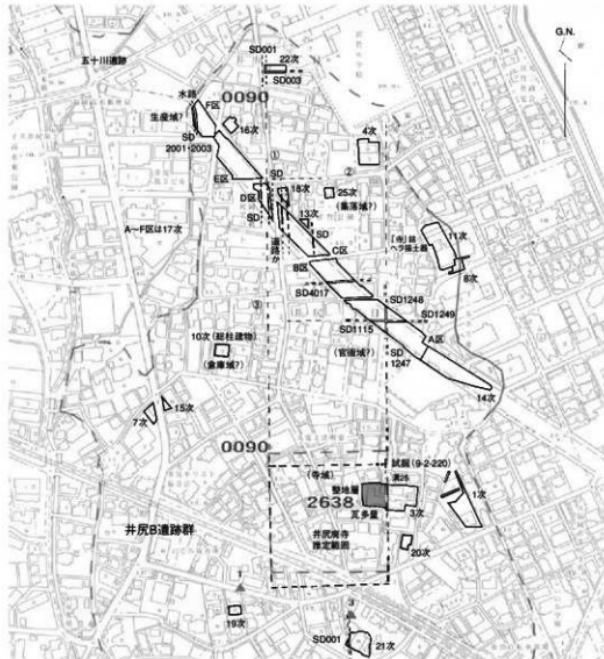


Fig.14 井戸B遺跡群北半における正方位を示す古代の造構（S=1/4,000）

みにあたるが、この線上は現在の道路①とほぼ合致する。これを南へ延ばすと（③）、井尻廃寺推定範囲西縁線に合致する。さらに他の調査地点で検出された古代の溝状遺構の位置とその延長線上を調べると興味深いことに気付く。3次溝25は寺院址整地層を区切る南北溝だが（註：井尻廃寺北東隅は事前審査番号92-220の試掘で検出した溝と推定され、井尻廃寺の範囲は分布地図よりも若干南側になる）、この線上の北側は17次A区SD1247・1248に合致する。これと直交する17次A区SD1115・1249の東西線上と、現在の街区の東西小路②（Fig.14）の間の距離は、井尻廃寺の推定北縁東西線とSD1115・1249線上の距離に一致する。これらは古代の区画と考えられ、この地区の街区はその名残の可能性が高い。また検出遺構から、「寺域」「官衙城」「倉庫城」「集落城」が推測され、今後の検証が必要だが、井尻B遺跡群には7世紀末から8世紀前半に計画的な撲点遺構群が存在したと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	いじりびーいせき16-だい22じちょうさほうこく—
書名	井尻B遺跡16
副書名	—第22次調査報告—
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	923
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2007年3月30日

遺跡名ふりがな	いじりびーいせきぐんだい22じ			
遺跡名	井尻B遺跡群第22次			
所在地ふりがな	ふくおかしなみくいじり1ちょうめ3ばん			
遺跡所在地	福岡市南区井尻1丁目3番			
市町村コード	40130			
遺跡番号	0090			
北緯	33° 33' 25" (世界測地系)			
東経	130° 26' 27" (世界測地系)			
調査期間	2001.11.06-2001.12.05			
調査面積(㎡)	141.33m ²			
調査原因	個人専用住宅建設			
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代、飛鳥時代～奈良時代、中世～近世	溝4+孤立柱建物1+性格不明大型土坑2	弥生土器十土師器十須恵器十瓦十瓦質土器十国産陶磁器	正方位を示す飛鳥時代末～奈良時代の溝は周囲検出の官衙状遺構群の方位と一致し現在までの街区の道路にも影響

井尻B遺跡 16

2007（平成19）年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 文化印刷株式会社

